



発刊によせて

熊本県公立文化施設協議会 会長
熊本県立劇場 館長

善尚中

震災は忘れた頃にやって来るという名言を残したのは、熊本ゆかりの夏目漱石の高弟、寺田虎彦と言われています。まさしく、虚をつかれたように熊本は他に類例を見ないような地震に見舞われました。

巨大な前震だけでもマグニチュード 6.5、本震にいたっては最大7.3を記録し、前震後、さらに本震後にも6や5クラス規模の揺れが続き、また数えきれないほどの、波状的に繰り返される地震を体験するという、自然の過酷な仕打ちが連続しました。

命綱とも言えるエネルギー、給水、道路、情報施設など、生活に不可欠なインフラ施設が寸断、破壊されるとともに、何よりも一つ一つの家族の団欒を見守る家屋が損壊し、県民は塗炭の苦境に追い込まれました。

そうしたなか、県内の文化施設も計り知れない損害を被り、多大の損失を余儀なくされました。こうした施設の被った打撃は、県民の文化や芸術、芸能に寄せる心の拠り所が痛打されることに等しく、その無形の損失は計り知れません。

熊本地震から2年、この間、県や市などの自治体や県内の文化施設協議会、各種の芸術・文化団体、地域住民や内外のボランティアの協力により、文化施設の修復や再興が図られています。まだ、途上にあるとはいえ、熊本の文化と芸術の拠点の灯火は途絶えることなく燃え続けています。

本誌、熊本地震記録誌は、このような途上にあるなか、音楽、演劇、芸能など、県内の文化施設が、震災を通じてどのような被害を被ったのか、さらに未曾有の事態に関係者はどのように対応し、また文化施設を緊急事態に備えてどのように開放したのか、その実情を、各地域ごとに記録した報告書です。

本誌は、被害状況を豊富な写真を多用して視覚的に明らかにするとともに、文化施設の具体的な被害箇所の規模や項目を詳細かつ網羅的に列挙し、さらに開館や閉館など、施設の運営状況や避難所としての受け入れ状況にも言及しています。

こうした意味で、本誌は未曾有の地震と関連する県内文化施設の現状を知る上で簡便にして信頼性のある第一次資料的な記録集と言っても過言ではありません。

編集方針のなかで可能な限り、価値判断の入る評価的な面を極力排し、事実の蒐集と報告を優先させたのは、本誌が後々の検証に耐えうる記録の集成となることを願ったからにはほかなりません。

とはいえ、本誌は地震による県内文化施設の被害の現況や活動報告にとどまらず、今後の展望と取り組みにも言及しています。また、コラム欄を設けて、各文化施設ならではの取り組みや特徴的な出来事の報告にも意を払い、記録集にありがちな無機質なイメージを和らげ、肌触りのある報告にも心がけています。

県内の各文化施設の関係者の協力と努力によって、このような公立文化施設協議会による記録誌の発刊に漕ぎ着けたことに、熊本県立劇場の館長としても、安堵の念を強くしています。

本誌は、後々、熊本地震の歴史を紐解くときの有力な資料となるに違いありません。本誌の発刊に向けて尽力してくださった各文化施設の関係者に心よりお礼申し上げる次第です。

平成30年3月